令和8年度 全国学力・学習状況調査実施概要　羽曳野市立高鷲南中学校

【実施日】

・オンライン方式調査

令和8年4月20日（月） 生徒質問アンケート ， 英語（「書くこと」・「読むこと」・「聞くこと」）

令和8年5月 7日（木） 英語（「話すこと」）

・筆記方式調査

令和8年4月23日（木） 国語 ， 数学

【実施生徒数】

3年生 116名

【実施内容】

◎ 教科に関する調査　国語・数学(筆記)

英語「書くこと」・「読むこと」・「聞くこと」・「話すこと」（CBT）

◎ 生徒質問調査　オンライン方式

【目的】

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育政策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

【調査内容】

調査問題、解答例、解説資料は国立教育政策研究所のホームページにて公開されています。
下記リンクもしくは右 QR コードよりご覧ください。

https://www.nier.go.jp/25chousa/25chousa.htm

※今回の調査結果は、あくまで学力や学習状況の一部分であり、生徒の学力や学習状況、学校の教育活動などのすべてを表すものではありません。

令和8年度 全国学力・学習状況調査 結果分析　羽曳野市立高鷲南中学校

1. 教科に関する調査結果分析と指導指針

(1) 国語

【概況】

正答数分布を見ると、9 問正答の生徒が 11.4%と最も多い一方で、第 1 四分位(6.0 問)以下の基礎的な知識に課題を残す層が全国平均より厚くなっており、基礎力の全体的な底上げが求められます。

【成果】

1. **目的や場面に応じた語彙の選択と表現**:「気持ちがより伝わるように、表現を工夫して書く(随筆の記述)」(3 二)の正答率は 92.1%に達しました。比喩や語句を用いて自分の心情を豊かに表現する力は、本校生徒の大きな強みです。
2. **文法事項の基礎的理解と識別**:「可能の意味を含む助動詞」(1 一)が 86.8%、「ら抜き言葉」(1 三)が 77.2%と、日常的に使用する言葉のきまりや文法規則の識別については、安定した理解度を示しています。
3. **情報の整理と文章構成の把握**:「文章全体を三つに分けて整理する」(4 一)では 67.5%の正答率を得ており、段落相互の関係性を捉え、長い文章全体の構成や要点を正確に読み取る基礎的な読解力は育っています。

【課題】

1. **文脈に応じた語彙・漢字の適切な運用**:「文脈に即した漢字の書き」(3 一)が 32.5%(全国 39.8%)、「語句の辞書的な意味を踏まえた意味の把握」(4 二)が 28.9%(全国 35.2%)と低迷しています。単語の単一的な暗記はできていても、文章の流れの中で正確に漢字を選択したり、語彙を活用したりする部分に課題があります。
2. **根拠に基づいた論理的な記述力**: 擬態語の効果を文章中の言葉を使って説明する問題(4 四)の正答率は 32.5%(全国 38.9%)に留まり、さらに無回答率は 21.1%でした。複数の情報を整理して論理的な説明文として再構成することに困難を感じています。
3. **客観的な視点による文章の推敲・改善**:「読み手の助言を踏まえ、文章の改善点を見いだす」(3 四)の正答率は 36.0%(全国 45.0%)でした。自分が書いた文章を他者からのアドバイスをもとに客観的に振り返り、より良い表現へと推敲・修正していく学習習慣が十分に定着していません。

【今後の指導方針】

- **改善のポイント**:「書く」活動から「読み合い、直す」活動へのシフトを強化します。
- **具体的方策**: 漢字・語彙指導において、単なる暗記ではなく、例文作成を通じた「文脈の中での活用」をセットで行い、文脈上の実用力を養います。
- **指導方法**: 記述問題の指導では、いきなり書かせるのではなく「根拠となる文言に線を引く」ステップを明示します。また、タブレット端末を活用し、お互いの記述に対して「改善コメント」を送り合うペアワークを取り入れ、客観的に自分の文章を見直す推敲指導を徹底します。

（2） 数学

【概況】

記述式の正答率が 32.6%と低く、評価の観点においては思考・判断・表現の領域に大きな伸びしろがあります。

【成果】

1. **具体的事象の数学的な表現**:「正負の数を用いた変化の表現」(1)は 82.6%と、8 割を超える高い理解度を示しました。日常生活の具体的な場面を、数や式に置き換えて処理する基礎的な計算や表現の技能は身に付いています。
2. **資料やグラフからの情報の抽出**:「グラフの座標の読み取り」(7(1))は 71.3%と良好です。提示された視覚的資料から必要な数値を正しく読み取る力は、一定のレベルに達しています。
3. **論理的説明の方針の理解**:「文字を用いた説明の方針の選択」(6(2))は全国平均に近い 63.5%で、数字的な説明の流れを論理的に理解し、正しい方針を選択する力は備わっています。

【課題】

1. **新領域「データの活用」への対応**:「累積度数」(9(1))は 33.0%（全国 46.0%）、「箱ひげ図の読み取り」(9(2))は 64.3%（全国 75.8%）と、いずれも全国平均を大きく下回っています。代表値やデータの分布傾向を多角的に読み解く力が十分に定着していません。
2. **数学的なプロセスの言語化:・説明記述における抵抗感**:「問題解決の方法を数学的に説明する」(7(2))では正答率が 27.0%（全国 33.9%）と低く、無解答率が 51.3%（全国 39.6%）と半数を超えています。単に計算して答えを出すだけでなく、「どのように求めたか」という過程を言葉や式で説明することへの強い抵抗感が見られます。
3. **図形の性質の論証力**:「三角形の合同を基にした証明」(8(2))の無解答率が 33.0%と（全国 22.2%）高い水準を示しました。仮定から結論に至る論理のプロセスを自分で書き起こす「論証力」の育成に課題が遅れています。

【今後の指導方針】

- **改善のポイント**:「解き方の説明」を重視した、言葉や式による言語活動の強化。
- **具体的方策**: 毎時間の終わりに「振り返り」を確実に行い、その日の問題を解く際に「どのような根拠を用いたか」などを短文で記述や説明することで理解の深化と定着を図ります。
- **指導方法**:「累積度数」や「箱ひげ図」については、他教科（社会や理科）の資料とも関連付け、実際のデータを比較して判断させる機会を増やします。また、記述問題では「途中までででも書く」ことを奨励し、過程の重要性の意識を高めます。

（3） 英語4技能

【概況】

IRT バンド 2（基礎的段階）に 46.3%の生徒が属しています。全体として、音声や英文のインプット技能に比べ、話す・書くといった表現（アウトプット）技能における課題が明確になっています。

【成果】

1. **特定の情報の聞き取り能力**:「ショッピングセンターのアナウンスから必要な情報を聞き取る問題」(2)は正答率が 86.5%を記録し、全国平均を大きく上回りました。
2. **読解における大意・概要の把握**:「物語を読み、登場人物の気持ちの変化を読み取る」(9)は 51.4%で全国平均を上回っており、文脈から全体像を捉える力は育っています。
3. **即興的な「やり取り」における基礎的な応答力**「電話でのやり取りの中で、遊ぶ約束をしている留学生に明日の天気を伝える問題」(15(1))において、本校の正答率は 44.0%で全国や府の平均を上回る成果が得られました。やり取りの中で即座に簡潔な事実を伝える基礎力は備わっています。

【課題】

1. **「書くこと」における文構成力・自己表現力の不足**「昨日の出来事を説明する英文」(11②)の正答率は 29.3%（全国 52.7%）、「思い出や感想を書く」(12)は 24.3%（全国 47.5%）と、まとまりのある英文を自分で構築する表現力が著しく不足しています。語彙や文法の知識が、書くことの実践において十分に活用されていません。
2. **「話すこと（発表）」におけるまとまりのある発信力の弱さ**「好きな人物とその理由を話す」(17)で正答率 20.7%（全国 48.0%・無解答率 41.4%）、「学校生活をよりよくする方法」(19)では正答率が 8.0%（全国 25.8%・無解答率 41.3%）に留まりました。自分の考えと、それを支える複数の理由を整理し、まとまりのある英語でスピーチすることは、現状ではかなり難しい状況にあります。
3. **即興的な「やり取り」における英語活用の正確性と表現の引き出し**「家に来てもらうように依頼する」(15(2)b)の正答率は 11.1%（全国 32.1%）と極めて低く、無解答率も 40.7%にのぼりました。相手との対話の中で、状況に応じた正確な英語表現を引き出し、即興的にやり取りを継続する能力に課題があります。

【今後の指導方針】

- **改善のポイント**:「聞く・読む（受信）」を足場にした、「話す・書く（発信）」活動の系統的な一体化。
- **具体的方策**: 1分間ライティングや、ICT 端末の録音機能を活用した即興的な「1分間トーク」等の実施を増やし、自分の考えを即座に英語で発信する瞬発力を養います。
- **指導方法**:「理由を添えて意見を述べる」際のテンプレート（I think... because...）を教室内に掲示するなど、定型表現を引き出し、記述や発話をスムーズにする方策を強化します。また、ICT 端末を用いた録音評価により、「間違えても話し続ける」姿勢を積極的に肯定し、話すことへの心理的なハードルを下げます。

（4） 総括：学校全体としての授業改善に向けた取組み

今回の調査結果を総合的に分析し、全教科に共通する本校生徒の成果と課題、および授業改善のポイントをまとめます。

【全教科共通の成果】

- **基礎的な情報の処理力・抽出能力の定着** 国語での「構成の整理」、数学での「座標や情報の読み取り」、英語での「アナウンスの聞き取り」や「物語の大意把握」など、提示された資料や音声などの具体的な場面から**「必要な情報を選択・整理する基礎的な技能」は全教科に共通して本校生徒の強み**です。

【全教科共通の課題】

- **根拠に基づいて「説明・表現する力」の弱さ（言語化における障壁）** 「なぜその結論になるのか」「どのような効果があるのか」といった、論理的根拠を自分の言葉（文字・数式・英語）で論じる記述・口述問題で軒並み正答率が低迷しています。
- **アウトプット場面での「高い無解答率」** 国語の記述（無解答率 21.1%）、数学の説明記述（無解答率 51.3%）、そして英語のライティングやスピーキング（無解答率 30～40%台）に顕著なように、「完璧に正解できないなら書かない（話さない）」という意識がはたらき、記述や表現を途中で放棄してしまう傾向が非常に強いです。

【授業改善に向けた取組みのポイント】

1. **「書く」ことへの抵抗感を減らすスキャフォールディング（足場かけ）**: すべての授業において、記述のヒントとなる「キーワード」や「文型テンプレート」を提示し、生徒が書き出しに迷わない一時的な手助けの適切な方策を実践していきます。
2. **「根拠」を問う発問の日常化**: 単に正解を確認するだけでなく、「なぜその答えになったのか」「どこに書いてあったか」を問い直す場面を全教科で設定し、常に根拠を意識させるように工夫していきます。
3. **無解答削減に向けたマインドセットの育成**: 「完璧な正解」を求めて固まるのではなく、「わかっていることを形にしていく」姿勢を評価する文化を学校全体で醸成します。中間段階の記述や部分的な説明も積極的に評価し、記述への自信を持たせるように努めていきます。

これらの取組みを全教職員で共有し、教科横断的に指導の質を高めることで、本校すべての生徒が「自ら考え、判断し、根拠を持って他者に表現できる力」の育成に注力してまいります。

令和8年度　全国学力・学習状況調査　結果分析　羽曳野市立高鷲南中学校

2. 生徒質問調査…本校の傾向

今回の調査結果から、本校生徒の生活習慣、学習態度、自己肯定感、および学校生活への適応状態を客観的に分析しました。大阪府および全国の平均値と比較することで、本校が持つ「強み（成果）」と、喫緊の対応を要する「課題」を明確にし、次年度以降の重点取組み事項を策定するための指針とします。

（1） 生徒の現状分析：成果（強み）

① 豊かな人間性と規範意識の高さ

本校生徒の最大の成果は、対人関係における誠実さと道徳的な態度の高さにあります。

- **他者への貢献意欲**：「人の役に立つ人間になりたいか」という問いに対し、「当てはまる」と回答した生徒が 60.5%に達し、全国平均（69.8%）には及ばないものの、「どちらかといえば、当てはまる」を合わせると 93.8%と非常に高い数値を示しています。
- **いじめへの拒絶**：「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思うか」に対し、肯定的回答が 93.0%であり、強い規範意識が見て取れます。
- **道徳教育の浸透**：道徳の授業を通じて「自分の考えを深めたり、話し合ったりしている」と感じている生徒は合計で 91.2%に上り、これは全国平均（91.3%）と同等で、学校としての指導が適切に行われているものと思われます。

② 良好な人間関係と学習集団の形成

学校生活の基盤となる人間関係において、肯定的な結果が得られています。

- **友達関係の満足度**：友達関係に満足している生徒は合計で 84.2%であり、学校が安心できる場所として機能していると思われます。
- **対話的な学びの土壌**：「学級の生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりできている」と回答した生徒は合計で 86.0%に達しています。これは、授業内のグループ活動やペアワークが、生徒の学びを深める一助となっていることを示唆しているものと思われます。

③ ICT 活用の定着

1・2 年時からの ICT 機器（タブレット等）の使用について、「ほぼ毎日（複数の授業または 1 回）」使用している生徒の合計は 62.3%となっています。また、ICT を用いた情報収集（50.9%が「そう思う」）についても意欲が高いことがうかがえます。

(2) 生徒の現状分析:課題(改善点)

① 生活習慣の乱れとメディア接触時間の過多

本校の最優先課題は、家庭での生活習慣、特にスマートフォンやゲーム機等の利用時間の長さにあります。

- **長時間視聴**: 平日に SNS や動画視聴、ゲーム等に「4 時間以上」費やす生徒が 52.6%と極めて高く、学力低下や生活リズムの崩れに直結する深刻な状況です。
- **就寝・起床時間の不安定**:「毎日、同じくらいの時刻に寝ている」生徒は 35.1%に留まり、全国平均を下回っています。

② 家庭学習の不足と読書離れ

学力を支える「自学自習」の習慣化が大きく遅れています。

- **家庭学習時間**: 学校外で「全くしない」生徒が 14.0%存在し、全国平均(6.9%)の倍以上です。また、3 時間以上学習する生徒は 4.4%にとどまっています(全国 8.9%)。
- **読書習慣**: 学校の授業外で読書を「全くしない」生徒が 42.1%で 10 分に満たない生徒も含めると 60%を超えています。情報の読み取り能力(リテラシー)を育む機会が不足しています。

③ 自己肯定感と将来展望の未形成

- **自己肯定感**:「自分には、よいところがあると思うか」に対し、「当てはまる」と自信を持って答えた生徒は 28.1%であり、全国(41.0%)を大きく下回っています。
- **将来の夢**: 将来の夢や目標を持っている生徒は「当てはまる」が 23.7%に留まり、全国(37.4%)に比べて低くなっています。学びを将来に結びつける意識(キャリア意識)の喚起が必要となります。

④ 教科に対する苦手意識(特に国語と英語)

- **国語**:「勉強が得意」と答えた生徒は 12.3%(全国 15.8%)、「好き」は 13.2%(全国 22.3%)に留まっています。
- **英語**:「勉強が得意」は 14.0%(全国 17.5%)である。特に「将来、積極的に英語を使う職業に就きたいか」に対し「当てはまらない」が 40.4%に達しており、実社会での必要性をあまり実感できていないものと思われます。

(3). 今後の取組みの指針

指針 1:メディア・タイムマネジメント教育の推進

SNS・ゲームの利用時間が全国平均を大きく上回っている現状を打破するため、学校・家庭・生徒が一体となった取組みが必要です。

- **ノーメディア・デーの設定**：定期テスト前だけでなく、日常的な「家庭でのルールづくり」も含めて適切なタイムマネジメントができるよう、家庭と連携して自律を促していきます。
- **リテラシー教育**：長時間のゲームや動画視聴が脳の機能や睡眠、学習効率に与える影響について、保健体育や総合的な学習の時間等を通じて科学的に理解させる取組みを推進します。

指針 2：ICT の「消費」から「創造」への転換

現在、ゲームや SNS・動画視聴等の「消費」に偏っている ICT の利用を、学習や表現のための「創造」にシフトできるよう支援します。

- **ICT スキルの向上**：プレゼン資料の作成（37.7%が「できる」）や、図・表を用いた情報整理（23.7%が「できる」）への自信がまだ低いため、各教科で ICT を「ツール」として使いこなし、成果物を発信する機会を増やします。

指針 3：自己肯定感を高める「認める」指導とキャリア教育

- **承認のシャワー**：「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思うか」に対し、9 割近い生徒が肯定的（32.5%が「当てはまる」、57.9%が「どちらかといえば」）であるため、この信頼関係を土台に、具体的かつ小さな成功体験を積み重ねさせる指導を継続します。
- **ロールモデルとの接触**：自分の夢が持てない生徒に対し、地域の人材や ICT を活用した外部との交流を通じて、学ぶことの意義を社会と結びつけるキャリア教育を強化します。

指針 4：読書習慣の再構築と「言語活動」の充実

- **朝の読書の徹底と環境整備**：図書館利用率の低さを改善するため、学級文庫の充実や、図書委員によるビブリオバトルの実施など、本に触れる機会を創出します。
- **「書く」ことへの抵抗感を減らす**：国語の記述式問題で「最後まで書こうと努力した」生徒は 72.8%と健闘しているため、短文からでも自分の意見を論理的に書く活動を全教科で取り入れます。

生徒質問調査結果からも生徒は概ね人間関係が良好で、他者を思いやる優しさを持っていることがうかがえます。この素晴らしい特性を「学びへのエネルギー」に変えるためには、まず生活習慣を整え、学習時間を確保することが不可欠です。特に、メディア接触時間の管理は喫緊の課題です。学校・家庭が危機感を共有し、生徒が自らの将来に希望を持って有効に時間を活用し、主体的に学ぶ姿勢を育むための取組みを加速させていく必要があります。
「だれもかれもが互いに認め合い　力一杯のびのびと生活できる学校にしよう」という本校教育目標の実現に向けて、今回の調査結果で明らかになった成果と課題を指導改善に繋げ、引き続き生徒一人ひとりの成長を支援していきたいと思います。